

## 「本を開いて、ふしぎの国へ ～親と子で楽しむ読書～」

児童文学作家 富安 陽子

こんにちは。今、御紹介いただきました富安陽子と申します。私は、大阪の箕面市に住んでいます。皆さん、ここ数日のニュースで御存じかもしれませんが、箕面、高槻、茨木の辺りで数日前に大きな地震がありまして、心配したのですが、幸い、うちは食器が大量に割れただけでした。でも、けが人もなく、御近所も特に家がどうかなったということもなく、ライフラインも今、普通どおりに電気・ガス・水道と整っております、おかげさまで皆無事に暮らしております。そして今日、ここにいられて、本当によかったと思っております。

今、ずっと控室の方で、本と子供たちをつないでくださる各会の皆様方の報告を本当に心強い思いで聞いておりました。私たちは本を書いて作る仕事をしているのですが、やはり子供の本というのは、それが最後に子供たちに手渡って行って、初めて完成するものですから、皆さんがお力添えいただいていることに本当に感謝しております。ありがとうございます。



今日は、今から1時間半、時間をいただいておりますので、私がどうしてこういう仕事をするようになったのか、今どういう思いで子供たちに向かって本を書いているのか、それから、もう少し具体的に個々の本のできあがってくる背景のようなこともお話ししてみようと思います。よろしく最後までお付き合いください。

私は、昭和34年に東京の豊島区というところで生まれました。実を言うと私の「富安陽子」という名前は、旧姓をそのまま使っています。今、結婚して姓が変わりましたが、私は「富安」という家に生まれました。富安という家は、実は九州と縁のある一家でして、元々福岡で造り酒屋をしている一族だったと聞いています。私の祖父は、その造り酒屋の三男坊で、家を継ぐことができないからということで、一人、対馬に渡って醤油屋を起こしました。それが「まるぜん醤油」という醤油屋でして、そこで商売をしていました。そこに私のおばあちゃんが佐世保から嫁いだというふうに聞いています。ただ、ずっとそこに居たわけではなくて、なぜかその一族はですね、対馬を離れて東京に上京いたしました。戦前の話です。

東京で一旗揚げようというので、まず、浅草で饅頭屋を開業いたしました。それが成功していれば、私は今頃、浅草の老舗の饅頭屋の孫娘ということになる訳なんです。残念ながらこの店は、たちまちのうちに潰れてしまいました。うちのおじいちゃんという人は、大変新しい物好きな人で、当時日本ではまだ珍しかった、「饅頭製造器」を店に導入しました。自動で饅頭を作る機械で、うちの伯母、父の姉に当たる伯母は、東京に引っ越したときに14歳だったそうですけど、その「饅頭製造器」から、ぽっこんぽっこんと饅頭がはき出されてくるのをよく

覚えているということでした。ただ、やはり浅草の職人の町で、人の手ではなく機械で作られている饅頭というのは非常にひんしゆくを買いまして、「あの家は饅頭を機械が作っている。」ということで、まったく売れなかったそうです。それでその饅頭屋が潰れまして、そのあと不動産関係の仕事をしているうちに戦争が始まり、そのまま東京で暮らすことになったという一家でした。

私は、戦後、その家に久しぶりの子どもとして生まれたわけです。というのが、戦争中には非常に辛いことが続きまして、うちの父の二人の兄は、相次いで戦争で亡くなりました。父だけが、海軍兵学校の卒業の年に戦争が終わって、辛くも生きて帰ってきたわけです。そして父が結婚して、そのときには私のおじいちゃんはまだ生きていましたが、伯母とおばあちゃん、それから父と母と、その4人の大人たちが暮らす豊島区の家で、私は長女として生まれたわけです。

富安という家の人たちは、一つみな共通点がありました。あの、みな大変な「ほら吹き」でした。みんないろいろとほらを吹いて、私を楽しませてくれました。私を煙に巻きました。

私のおばあちゃんは、妖怪の話の達人でした。私は毎晩寝る前に一つずつ、おばあちゃんに、「何かお話をして。」とねだりました。すると、おばあちゃんは毎晩一つずつ、私に血も凍るような怪談を聞かせてくれました。しかも、おばあちゃんが私に話してくれる怪談というのは、「むかしむかし、あるところに」というような、無責任な、他人行儀な話ではなく、すべて地名と実名が入るお話でした。

「昔、近所の家のなになにさんという人が、満願寺という寺の所を通りかかったら、古い知り合いに会って、久しぶりに『家に来てご飯を食べていけ。』と言われて、誘われて行った。いい調子になって飲んで、食べて、すっかり気持ちよくなって『お風呂に入れ。』と言われたのでお風呂に入っていて、ふと朝、目が覚めると、『あなた、どうしたんだ。そんなところで何してるんですか。』と言われて目が覚めてみたら、田んぼの肥溜めに首まで漬かっているところを救出された。そういうことが相次いで起こったのでおかしいと思って、満願寺の境内をみんなで調べたら、その境内の大きな楠の木の根元に穴が空いていて、そこに歳も分からないくらいのお狸が一匹すみついていて、その狸をやっつけたらそういうことが起こらなくなった。」という話を頻繁にしてくれるおばあちゃんでした。

私はいろいろ怖い話も聞いて、女中さんに化けて狸がやってきて、実は正体が女中さんだった話とか、それから「お歯黒つぼ」という、昔使っていたつぼの中に変なものが見ついていたという話とかいっぱい聞かされまして、聞かされたときに怖くなって、夜、お手洗いにいけなくなるんですけども、それでも、どうしても話を聞きたくて毎晩毎晩、ねだっていました。ちっちゃい子っていうのは、どうしてあんなに不気味な話が好きなんでしょう。

私はもう一つ大好きだったことがあります。それは、おばあちゃんが、総入れ歯だったんですけど、入れ歯を口から外す瞬間をいつも食後、見逃すまいとしていました。本当に、入れ歯を口から出すと、くしゅっと口元が縮んで人相が変わるのが面白くて、ご飯が終わって、おばあちゃんが入れ歯の手入れをするところを絶対見逃してはいけないと思って、ずっと付きまわって、「おばあちゃん、入れ歯出すの見せて、入れ歯出すの見せて」って。おばあちゃんが、もう困ったような顔をして「もう、じゃあしょうがない、見せてあげる。」って言って出すの

を見るのがうれしくて。それで、出すと「きゃあー。」っていうんですけれども、楽しくて楽しくて、そういうのが大好きでした。

それから、おばあちゃんはお話だけではなくて、日常生活の中にもしょっちゅう妖怪が出てくる人でした。お小言のときにも妖怪が出てきました。お墓に行って走ったりして転ぶと、「土の下に引っ張り込まれる」と。「お墓のあちこちには、あの世に通じる穴が空いているから、そういう所で走って転んだら地面の下に引っ張り込まれるから走っちゃいけない。」とか、それから、お風呂の掃除を一緒にするんですけど、昔は木桶のお風呂で、お湯を抜いた後に木桶のお風呂の中に入ってこすらなきゃいけないくて、冷たくて、冬なんかいやだなあとあって、「おばあちゃん、毎日しなくていいんじゃない。」とか、そういうことを言っていると、「お風呂に『あかなめ』という妖怪がすみつくようになるよ。あかなめっていうのは、人間の垢が好物で、黒い長い舌でペロペロペロペロお風呂の垢をなめる。」と。「陽子ちゃん、お風呂入ってる時、そういうのが出てきたらいややろ。だから毎日、お風呂を洗わなあかんのや。」と言われました。

それから、靴をそろえて脱がないと、怒られました。「靴をそろえて脱がないようならしない子には、妖怪がつくんだ。」と、おばあちゃんは言っていました。「すねこすり」っていう妖怪を知っていらっしゃる方いますか？何人かいらっしゃいますね。あんまり今、はやらない妖怪ですけども、妖怪図鑑なんかを見ると載っていたりします。すねこすりっていうのは、人間の目には見えない妖怪だそうで、「今、何か足元を触ったような気がする。何か今、ここをすっと通ったような気がする。でも、何にもいない。」そういうときには、妖怪すねこすりが人間の足に体をこすりつけているのだそうです。妖怪図鑑に載っているすねこすりっていうのは、可愛い猫みたいな絵が描いてあります。でも、私のおばあちゃんが話してくれたすねこすりは、妖怪図鑑のすねこすりとはちょっと違っていました。「すねこすりは、決して人間の目には見えない妖怪だ。でも、一度だけ、おばあちゃんの友人が見た。」という大変怖い目撃談がありまして、その友人の話によると、すねこすりは黒い毛のかたまりのような、煙



のかたまりのような、丸い体をしているようです。そして、丸い体の真ん中に目玉が一つあって、長い触覚のような手を持っているんだそうです。だらしのない子がとても好きで、靴をそろえて脱いでいない子とかいと、その長い触覚のような手で、その子の足に「キュッ」としがみつくだそうです。「そうすると何にもないところで転ぶから、気を付けていなさい。」と言われました。本当にそうすると、言われて三日以内ぐらいに、何にもないところで転ぶわけです。「わあ怖い、すねこすりにつかれた！すねこすりにつかれた！」と言うと、「そうやろ。」と。「だから、靴はそろえて脱がなあかんのやで。」というふうに言われました。

私の父も直系の息子ですから、大変なほら吹きでした。私には、息子が二人います。もう大きくなりました。上が27歳、下が25歳です。男の子二人です。身長も大きくなりまして、今二人とも189cmくらいあります。うちは、夫は191cmなので、何だかみんな「ぬりかべ」みたいな

家族に囲まれて暮らしているんですけれども、その子どもたちが小さいときに、うちの父は、今も元気しておりますが、よく家に遊びに来ていました。東京に父たちがいて、私が結婚して大阪にいたわけなんですけど、父が来ると、父がヨーグルトが好きなので、毎朝ヨーグルトを出します。すると下の息子が父に聞きます。「おじいちゃん、ヨーグルトっていうのは、どうして『ヨーグルト』っていうの。」と。すると父が答えます。「これは、『よ〜くグルッとかき回して食べる。』っていう名前なんだよ。」翌日、またヨーグルトを出します。するとまた、面白がって息子が聞きます。「おじいちゃん、ヨーグルトって、どうして『ヨーグルト』っていうんだっけ。」、「これは、牛乳に『ヨー、グル、トオ！』という掛け声をかけると、こういう物が出来上がるんだ。」そういうことをずっと言う人でした。

あるとき父が家に来て、子どもたちに話しているのが聞こえました。「おじいちゃんは、この前、四国の『よんまんじゅうがわ』という川に行ってきた。」これはですね。あの、まれに分からない人がいるので、一応、念のため、「よんまんじゅうがわ」は正しくありません。正しくは、「四万十川（しまんとがわ）」といいます。しかし、父は子どもたちに「『よんまんじゅうがわ』という川に行ってきた。そしたら、川上の方から大きなまんじゅうが、どんぶらこっこと流れてきて、拾って食べると大変うまかった。ぜひ今度はおまえたちを連れて行く。」そういう話をする人でした。何年か前、息子たちが小学校の6年生と4年生だったときでしょうか、その年はノーベル賞を日本人がダブル受賞した年で、田中さんと小柴さんという方たち二人がノーベル賞を受賞されて、非常に日本全体が盛り上がっていたときに、ちょうど記者会見の日に父がうちに来ていました。下の子が聞きました。「おじいちゃん、ノーベル賞っていうのはどうして『ノーベル』っていうの。」と。すると父が答えて言いました。「それは、世界中で初めてノーベル賞をとった人の家に、電話が無かったんだ。」と。「非常に連絡するのにみんな苦労して、それを記念して、電話が無いってことで『ノーベル』っていうふうになったらしいよ。」そしたら、さすがに6年生の息子が怪しんで、「おじいちゃん、ノーベルって確かダイナマイトを発明した科学者の名前じゃなかったっけ。」というので、父は平気な顔で「ま、そういう説もあるね。」とっていました。そういう父でした。

もう一人、うちの家には、父の12歳年上の姉にあたる、ふみこおばちゃんという伯母と一緒に暮らしていました。伯母も、大変なほら吹きでした。伯母は私にどんな話を吹き込んだかというので、こんなことを言いました。幼かった私に、「いい子にしてると、一年に一度だけ、十五夜の夜に、満月の月から、うさぎが、いい子の家にだけお餅をまいてくれる。」と言ったわけなんです。

そして、本当に一度だけ、東京の家の庭に、餅が降ってきました。私はその日の夜のことを今でも本当にくっきりと、ビデオを再生するように思い出すことができます。9月の15日の生暖かいような夜でした。まだそんなに涼しくはなっていないので、ですから、東京の家の居間と縁側の間の障子戸が全部開いていました。そして、その縁側の向こうのガラス戸も雨戸もまだ閉められていなくて、開け放たれていて、暗い庭から風が吹き込んできていました。夕飯が終わって、父もまだ会社から帰ってきていませんでした。私と母と伯母とおばあちゃんまで夕飯を終え、私は、終わった食器を手伝って台所の母の元に運び、母が台所で一人食器を洗っていました。その後、洗い上がった食器を拭くのが、また私とおばあちゃんの役でした。私とおばあ

ちゃんは居間で、その順番が回ってくるのを待っていました。今思えば、伯母の姿が見当たりませんでした。

しばらくそうやって居間のちゃぶ台の所に座っていると、どこからか声がしました。「陽子ちゃん、お庭に出てごらん。お月様からお餅が降ってきてるよ。」私はびっくりして、靴脱ぎ石の上のサンダルを突っかけて、庭に飛び出しました。空を見上げると、東京の家並みの間の狭い夜空に、今まさに大きな満月が上ろうとしていました。そして、その月から、これぐらいの丸い小餅がバラバラバラ降ってくるのが見えました。お餅は東京の家の庭のこけの上で弾んで、パーッと散らばっていきました。私は嬉しくて嬉しくて、夢中になってそのお餅を拾い集めました。そしてまず、居間にいるおばあちゃんの所へ持って行きました。「おばあちゃんこれ見て。これ、今お月さんから降ってきた。うさぎさんが陽子ちゃんにお餅を降らしてくれた。」おばあちゃんは、ほら吹きのプロでしたから、それぐらいのことでは少しも動じることはありませんでした。「よかったな。昔おばあちゃんの家にも降ったことがあるで。」と言いました。私は今度はそのお餅を台所の母の元に持って行きました。母のために一言申し上げておくと、母は北国富山から富安の家に嫁いだ、大変真面目な女性でした。多分、日々、あのほら吹き的一家の中で、いつも対応に苦慮していたのではないかと思います。「お母さんこれ見て。今、お月様から降ってきた、うさぎさんのお餅。」母は洗い物の手も止めずに一言だけ、「よかったね。」と言いました。私は子供心に、「何で、何でお母さんはもっと驚いてくれないんだろう。こんな大変なことが起こってるのに、どうしてなんだろう。」と思いました。でもそんなことを悩んでいる場合ではないので、もう一度、私は庭に出て、月を見上げて待ちました。もう一度、お餅が降ってきました。私は、またそのお餅を拾い集めて台所に持って行って、もう一回降らないかなあと思って庭に出ると、もう一回お餅が降ってきました。私は嬉しくて嬉しくて。でも、この話を長い間誰にもしませんでした。幼稚園の友達にも先生にも、小学校に上がってからも、誰にも言いませんでした。多分、言ったらもう二度と起こらないだろうと思いました。これは言っただけいけない秘密だと思って、ずっと心の中にしまっていました。

ただ、私が小学校に入学する前に、父の仕事の都合で東京を離れて、父と母と私の3人で大阪に引っ越しました。おばあちゃん、おばちゃんと別れ別れに暮らすようになって月日が流れていくと、だんだん自信がなくなってきました。あの夜あったことは本当だったのか嘘だったのか分からなくなって、とうとう我慢できなくなって、私は4年生の夏休みに東京に行ったときに伯母に尋ねました。「おばちゃん、覚えてる。昔、いっぺんだけ、お月さんからお餅降ってきたことあったやんね。うさぎさんがお餅降らせてくれたことあったやんね。」伯母は、10歳の私に申し訳なさそうに言いました。「まだ信じてたん。」そしてその時、初めて全てを白状しました。「あれは2階から、おばちゃんが、まいてたんやで。」「そんなことはない、おばちゃん見えへんかった。」「隠れながらまいて大変やったんや。」と。それで、私が集めて台所に持って行ったお餅を、伯母はまた2階からまいていたんだそうです。リサイクルしてたんですね。そう言えば、丸餅の数が増えてなかったなということを苦々しい思いで、思い出しました。でも、10歳のその日、私は、心に堅くリベンジを誓いました。「私が大きくなって、お母さんになったら、今度は必ず、子供をだましてやろう。」と私は心に誓ったわけです。

そして、私はその誓いを忘れませんでした。私が子供を産み、上の子が5歳、下の子が3歳

になる、中秋の名月の夜を待ちました。そしていよいよ、その夜がやってくると、餅まきを決行することにしました。うちの子たちというのは多分、同世代の方もいらっしゃるかもしれませんが、27歳と25歳というのは『ポケモン』の世代です。幼稚園のときに、リアルタイムで世の中に初めてポケモンというものが登場しました。もう、子供たちは夢中になって「ポケモン、ポケモン」でした。どんどん新しいゲームソフトが出て、ドンキーコングだとかマリオだとか、そういうのが出て、ロックマンとかですね。そして、ハードもいっぱい出たわけですよ。64があつてプレーステーションがあつて、ゲームボーイがあつて、どんどんそういうのが出て。ゲーム世代でしたから、その子たちにいきなり「月のうさぎが餅を降らす」って言っても、どうかなあと思って、徐々に洗脳することにしました。

「しーちゃん、まーちゃん。お月様に何住んでるか知ってる。」「知ってる。うさぎ。」「そうやね。あのうさぎ何してんの。」「餅ついとる。」「そうやね。そのお餅どうするか知ってる。」「知らん。食べるんちゃうか。」「いや、うさぎは餅は食べへんねんで。草食やしな。あんなん食べたら喉つまんねんで。あれは、ついといて、1年に1回、十五夜の夜に、お利口にしてたらその子んとこだけ、まいてくれるらしい。」「さあ、しーちゃんとまーちゃんのところに餅まいてくれはるかな。今日は十三夜やな。お月さんだいぶ膨らんできたな。」「今日は十四夜や、明日はいよいよ十五夜やな。」そう言って盛り上げました。そして、丸い小餅をたくさん買ってきて、伯母はそれを生でまいてくれたんですけど、私は餅を生でまくのは、いやだったので、和紙で一つ一つおひねりにしました。そして、そのおひねりの紙の裏にはわざわざ、うさぎからと分かるように、マークを入れました。こんなおひねりを15個ばかり用意して、夫と二人で結託して餅まきを決行しました。

その日、私はわざと洗濯物を取り込まずにおいて、夜暗くなってから子供たちを物干し台の所におびき出しました。「あ、お母さん洗濯物入れんの忘れてた。ちょっと急いで入れなあかんから手伝ってくれるか。」と言って子供たちと一緒に物干しの所に行き、それを待って、夫が一つ目の餅をまきました。庭の草むらでポソッと音がすると、子供たちはビクッとそっちを見ました。二つ目の餅がポソッと落ちてくると、下の子が叫びました。「餅や。」それを合図に夫が、残りの餅を全力で投下しました。ポソポソ、ポソポソポソ。もう二人は大喜びでした。先を争って餅を拾ってきて、「お母さん、お母さん、うさぎさんがお餅降らせてくれた。うちにお餅降らせてくれた。」と言いました。

ただ、一つ困ったことがありました。それは翌日二人がそのお餅をどうしても幼稚園に持って行くと言ってきかなかったことです。私は一生懸命止めました。「やめとき。いろいろ、うさぎにも都合っていうもんがあるんやで。日本全国にどんだけ子供おると思う。みんなのそこには到底まかれへんで。まいてもろうてない子かわいそうやろ。だから、持って行ったらあかん。かわいそうやからやめとき。」すると、上の子は胸を張って私に言いました。「そういうお友達には、『お利口にしたら来年まいてもらえるかもしれへん。』って言ってあげたらええねん。」

そして、とうとう二人は私の制止を振り切って、青い通園バッグの中に1個ずつ入れて幼稚園に出かけていきました。私はその日一日中、息子たちの帰りをハラハラドキドキと待ちました。「今頃、何と言われているだろうか、嘘つき呼ばわりされていないだろうか。」でも、集

団降園の待ち合わせ場所で待っていると、子供たちが楽しそうに帰ってきました。さよならの挨拶をして3人になるのを待ちかねて、息子たちに聞きました。「どうした、お餅見したったん。」「見したった。」「先生、なんて言うてはった。」「先生、『ええなあ』て言うてはった。『しーちゃんとまーちゃんのところ、うさぎさんが餅降らしてくれたんや。先生のところもまいてくれへんかなあ。』って言うてはった。」私は心の中で、先生に手を合わせました。「ありがとうございます。ナイスフォロー、さすがプロ。」と思いました。でも、当然、同世代の子供たちの間では、これは大変な物議をかもしることになったわけです。「『ええ子にしとったら』って、それはどういう基準や」と。「お前らありやったら、うちもありやないか。」ということになったわけです。そしてその日、家に帰って、随分、親を追及した子供たちがいたようです。「なんか、しーちゃんとまーちゃんのところなあ、昨日、うさぎさんがなあ、月から餅まいてくれたらしいで。うちもまいてくれてたん違うん。」とか、「何でうちは、まいてもらわれへんかったんやろ。」という子がいて、私が住む箕面の町では、その年、一日遅れで餅をまいた家が何軒かありました。

これは大変迷惑がられました。その翌日、子供たちと一緒に幼稚園に行くと、何人かのお母さんに呼び止められ、陰に呼ばれました。「ちょっと、ちょっと。あのな、うちな、マンションやねん。餅まくの、めっちゃ大変やったんやで。下に人通りおらんようになってからまいて、終わったの9時や。ああいういらんことせんといてくれへんか。」と言われました。でも、思います。私がずっと今も、月から降った餅を覚えているように、一度だけ餅が降った子供たちも今、25歳、27歳になりながら、あの日のことを覚えてるかな、どんなふうにして覚えているのだろうと思ったりします。

ただ、うちでは、残念ながら1年限りでは終わらずに、毎年餅まきをすることになりました。毎年毎年、餅をまきました。十五夜になると餅をまきました。でも、さすがに上の子が6年生、下の子が4年生になったときに、もうやめようと思いました。なぜかっていうと、5年生の理科の教科書に、「月」という項目があるからです。「月のことを習って、餅まきはどうか。」と思って、「今年はやめておこう。」と思いました。すると、その十五夜の満月の夜に息子たちが窓辺で話しているのが聞こえました。「今夜あたり、ちやうか。」「そろそろやな。」期待を裏切るわけには行かないので、「まくか。」と思って、その年は丸い小餅を用意していませんでしたので、冷凍してあったサトウの切り餅を半分にして、ゴツゴツのおひねりにして、まいてやりました。すると6年生の息子がそれを拾って私の所に来て言いました。「お母さん、めっちゃ冷たいで。」と。さっきまで冷凍庫に入ってたわけですから、「そうやろ、そうやろ。これはやっぱり月の方が、気温が低いからやな。」と言いました。そうなると、もう私がほらを吹いていたのか、息子たちが私をからかっていたのか分かりませんが、これは長くうちで続いた懐かしい年中行事です。

私の場合には息子たちに、わざわざ種明かしをすることもなくフェードアウトしていったわけですけれども、今でも時々息子たちは言っています。「よかったなあ。昔、うち、月から餅ふとったよな。」という話をしたりしています。

私は、そういう家で育ちました。ですから、私はいわゆる「ファンタジー」と言われる物語を書き、私のお話の中にはたくさんの妖怪が出てくるんですけども、多分、そういうお話を書く一番のおおもとにあるのは、幼い頃の体験であり、大人たちから語られた物語だと思います。今、大体、年間10冊前後の新しい本を書きながら、30数年ずっとこの仕事をしていて、ざっと数えたら120冊くらいの本が世の中に出ています。



有難いことに、どの本も絶版になる物が少なく、初期に書いた『クヌギ林のザワザワ荘』であったりとか、この『やまんば山のモッコたち』であったりとか、こういう本も、今も、お陰様で30年たっても版を重ねている有難い本です。『まゆとおに』なんかも、本当に随分長い命をもって今も生き続けています。子供の本を書く仕事っていうのは本当に大変面白くて、「何で子供の本を書くんだ。」ってことをよく言われるんですけども、その時に私は、いつも同じことをお返事するようにしています。それは、「大人よりも子供の方が、間違いなく熱心な読者だと信じているから」です。

子供っていうのは本当に好きな本だとなると、何十回でも同じ本を読んでもくれます。何十回も何十回もその本を読んで、そして、その本の世界で遊んでもくれます。私は大きくなってからも、今でも本が好きですので、資料の本などを含めれば、年間300冊、400冊本を読んでいると思います。大人になって出会った大好きな本もいっぱいあります。池波正太郎の『剣客商売』なんかは、大きくなってから夢中になりました。でも、どれだけ夢中になっても、例えば、読み終えてすぐ、「じゃあもう一回、一から読もう。」とか、あるいは『剣客商売』を読んですぐに、「私は明日から剣道を始めろぞ。」とか、あるいは「東京の小石川に引っ越そう。」とか、そういうことは思わないわけです。

私は4年生のときに、生まれて初めて、父から「アルセーヌ・ルパン」の『813の謎』という本を買ってもらいました。その当時、私は転校したてで、ちょっと心細いときだったので、父は、そんな私にその本と一緒に本屋に行って選んでくれたんですけども、それはもう夢中になりました。アルセーヌ・ルパンの『813の謎』は面白くて面白くて。だから、4年生の当時の私の将来の目標は、「フランス人になること」でした。できれば怪盗になりたいと思っていました。「どうして私の目は、ルパンの物語に出てくるパリジェンヌたちのように、エメラルドのような緑色とか、湖の青色をしていないで、こんなつまらない黒色をしているんだろう。」と、真剣に悩みました。ああやって、人間が現実と非現実の境界を越えて、物語の世界の中に入り込めることを許される時間っていうのは、そう長くはないだろうと思います。でも、子供たちにはその時間は許されていて、だからこそ、何十回、何百回も同じ本を「読んでくれ。」と言ってはばからないわけです。好きになると、大親友のような関係を作ってくれます。

同じ本を何回も何回も読むのも不思議ですけど、もっと分からないのは、図書館に行ったときに、家にあるのと同じ本を借りてくれと言うことがあります。「あるやん。うちにある本やで。」と言っても、「いや、ボクはこれが好きやねん。だからどうしてもこれを読みたい。」そういうふうと言って、また同じ本を借りたことがあります。そんな付き合い方をしてくれる読者というのは、子供以外にはないだろうと私は信じています。

また、子供の本というのは大変難しくて。では、何が大人の本と子供の本が一番大きく違うか、「子供の本と大人の本と、どう違うと思いますか。」と大学生に聞くと、大学生はいろいろと答えてくれます。「文字が大きい。」「漢字が少ない。」「絵が多い。」「ハッピーエンドが多い。」どれも間違っていない。でも、実を言うと、私が書いた中でも、「ヤングアダルト」という中高生向きの物語になると、決して、文字も少なくありません。漢字も多いですし、絵も中には1枚も入っていません。でも、これも児童書のジャンルに入るわけです。「大人になる前の子供たちが読む本」です。かと思えば、こういう絵本のように、全ページがカラーの絵と、短い文章で構成されているものもあるわけです。これも子供の本です。子供の本が大人の本と一番大きく違うところは、「読者が成長する」ということだと思います。大人の本を図書館や書店でよく見てみてください。年齢別になっている本は、まず、ないと思います。「この本は、30歳以上でないと読めません。」とか、「残念ですが、この本は40歳からっていうことになってるんです。」とか、「50になったら読めますよ。」という本は、絶対にありません。大人っていうのは実は、大人になってしまうとそんなに成長しない、でも子供というのは、3歳の子供が使える言葉っていうのと、4歳の子が理解できる物語と、5歳の子の語彙というのは全く違います。まして、小学校の低学年、中学年、高学年、学齢が上がって行くにつれて、子供たちの言葉の世界は、どんどんどんどん広がっていきます。3歳の子に語れる物語と、5歳の子に楽しんでもらいたい物語、そして、小学校に入ってからの子供たち、中学年、高学年、そこで使える言葉というのは、全部違います。私たち子供の本の作者の面白いところは、そうやって言葉のデータベースを読者に合わせて、全部違う言葉の語彙の中で、物語を作っているということです。

絵本なんかは、やはり耳から聞いて入る言葉ですから、まず文章一つも短くします。複文はあり得ません。「なになにさんが、こうしてああして、こうなってこうなった。」って言ったら、聞いているうちに子供は何が起こっているか分からなくなります。だから、主語と述語を1対1で対応させて、文章の長さも考えます。それから、台詞に対して誰が言った台詞かということ必ず明確にします。それから、同音異義語は使いません。耳で入ってくる言葉だからです。そして、読んで聞く言葉ですから、リズムを考えます。同じ文章でも、長い物語の中に使う文章と、絵本に使う文章っていうのは、全く違うわけです。そこが、子供の本を作る者のプロとしての面白さだと思っています。そして、それを届けて、それがはまった時に子供たちが、めちゃくちゃ好きになってくれる、ずっとそれを覚えていてくれる、その子にとってかけがえのない一冊になるかもしれない、そういう思いの中で、物語を書いているように思います。

物語を思いつくきっかけというのは、いろいろあります。でも、一つ言えるのは、私たち大人が作って子供に手渡すという、作り手と受け取り手のギャップが大変大きい商品だということが言えると思います。だから、いろいろと悩みます。私が小さい時に面白かったことを、今の子供たちも楽しんでもくれるのだろうか、これだけ世の中が変わって忙しくなってしまうと、刺激がたくさんある時に、私が小さい時にワクワクドキドキしたことを子供たちもワクワクドキドキして楽しんでもくれるかな、というふうに思いながら書くわけです。でも、やはり手がかかりになるのは、自分が小さかった時の原体験であり、自分の心の中に残っている自分の幼い頃の風景であったり感情です。私が小さい女の子だった時に、どんなことを待っていて、どんな

ことがうれしくて、どんなことが悔しくて、どんなことが悲しかったか、そういうことを手がかりに書いていきます。



さっき御紹介いただいた、この「サラとピンキー」という本ですけれども、これ実は、私が作・絵で絵もかかせてもらっているんです。お恥ずかしい限りなんですけれども、これなんかは、もう「ごっこ遊び」です。私が小さい時にした「ごっこ遊び」をそのまま、何でもありの世界、「ごっこ遊び」ほど都合のいい世界はありません。全部自分が主人公で、何でも許される。おまけに、女の子同士で遊ぼうとすると、そこでぶつかり合うわけですね。「どっちがお母さんをやる」とか、「私の方がお母さんやりたい」とか、「あなたはお母さんに向いていない」と、ぶつかるんですけど、サラとピンキーの場合は、サラちゃんの相手役はピンキーという豚のぬいぐるみなので、どれだけでもサラちゃんのわがまを聞いてくれる、何でもびっくりして、「それいいですね。」って言うってくれる相棒なわけです。どこに行っても、何もかもがうまくいく、そんなハッピーな物語の世界、それが「サラとピンキー」です。とにかく、ごっこ遊びですから突然です。「今日、何して遊ぶ。」「そうだなあ。春で気持ちがいいから、じゃあ、パリへ行くのもいいかもね。」「パリに行きましょう。」パリに行きます。パリに行けば、パリの人たちが「あなたたちが有名なサラちゃんとピンキーさんですか。」「じゃあ、特別なケーキを召し上がってください。」と言われ、そして、宝石泥棒を捕まえたら、そのマダムから、「どうぞどうぞ、好きな宝石を一つ持って帰ってください。」と言われて、大活躍をして、何も不安のないまま、全てうまくいくという、本当に「ごっこ遊びの真髄」というか、そういうお話、全て何もかもハッピーな話がいいなあと思って、そういうお話を書きました。毎回、サラちゃんとピンキーは思いつきでいろんなところに行きます。夏、暑ければ、「暑いから、どこ行く。」「じゃあ、涼しいところ行こうか。ヒマラヤもいいかもね。」「ヒマラヤに行っちゃいます。今度、3作目で書いているのは、夏休みも近づいて、「さて、どこ行く。」「やっぱり、南の島がいいかもね。」そして、宝物を見つけます。そういうごっこ遊びの中の醍醐味が全部詰まった話を書きたいと思って書いたのが、この「サラとピンキー」です。1作目、2作目、今、3作目がもうじき出るんですけど、見ていただくと分かるんですけど、だんだん絵がうまくなってきました。初期の頃に比べて、だんだん絵がうまくなってきました。それは、ちょっと自慢したので、是非、見比べていただければと思います。

それでは、ちょうど『もとこども』も出てきたので、この話もさせていただきます。『もとこども』っていうのも、これは私の小さい時の体験に基づいて生まれた話です。まだ、小学校に上がる前のことです。私はその日、母と二人で電車に乗っていました。私は、まだ小さくて、足が床についていませんでした。それで、座席に座って足をブラブラブラブラさせるんですけど、そのたびに、横にいる母から、「だめ。ブラブラさせちゃだめ。」と、足を押さえられました。私は、電車の真ん中の座席の間の通路を見てい



ました。四人掛けじゃなくて、長い座席が並んでいる普通の電車なんですけど、その真ん中に通路があって、そこに窓の光の影が、四角いキャンパスのように床に落ちていたのを覚えています。そして、その光の窓の中を電信柱がずーっと走って行くのが面白くて、それをずーっと私は見つめていました。

ふっと目を上げた時に、そんなに混んでいませんでした。平日の昼間だろうと思います。母と私のほかに、その車両の中には7、8人の大人たちがいたかと思います。みんな座っていました。おじいさん、おばあさん、おじさん、おばさん、子供を連れのお母さん。その時に私は、ふと、あることに気が付きました。「この人たちは、みんな、もと子供だったんだ。」それは、小さい私にとって、何だか異界をのぞき見たような大発見でした。皆さんも経験あるかもしれませんが、自分の親の写真を見た時って、何か心がザワザワしたことってないでしょうか。「あっ、お母さんがこんなちっちゃな女の子だったんだ。」まさに、そういう感じでした。ここにいる大人が、実はみーんな、もと子供だった。その不思議な感覚というのは、ずーっと、大きくなってからも残り続けました。

先程からお話ししているように、私たち子供の本の作者っていうのは、自分が小さかった時の思い出を手がかりにして、記憶を手がかりにして物語を書いていくことが多いように思います。だから、いろんなタイプの児童書の著者がいます。皆さん好きなジャンルも違うし、得意なジャンルも違うし、仕事のやり方も違うし、表現も違う。いろんなことはバラバラなんですけれども、私が最近、感じているのは、児童書の作者で一つ共通しているのは、みんな、自分の子供時代のことを本当によく覚えているということです。

数年前に『魔女の宅急便』の角野栄子さんと、「つんつくせんせい」を書かれた、たかどのほうこさんと私と3人で、<sup>ていだん</sup>鼎談を上野でしたことがあったんです。結構、手に汗握る鼎談だったんですけど、その時に角野さんが「絶対に予定調和は嫌だ。だから、打合せはしない。当日そこで、お互いに質問をして、ぶっつけ本番で答える。そういうふうにしたい。」ということ断言なさまして。もう一つ無謀だったのは、そこでリレーでみんなが物語を作る、その場で作る、しかもタイトルをその場でくじ引きで決めるという無謀な計画を立てられました。その時、私が願ったのは、「そのリレーの物語のラストにだけは当たりたくない。」ということでした。みんなが順番に作って最後はまとめないといけないわけですから。でも、私はその場でジャンケンで負けて、ラストになりました。本当に大変な鼎談でしたけど、面白い鼎談でした。

その中で一つ、角野さんが質問なさったのは、「みんな、どんな子供だったか話さない？小学校に入学した時のことを話しましょうよ。小学校に入学した6歳頃のことで何かすごく覚えていることがあったら、話しよう。一人ずつしよう。」っておっしゃって、角野さんは、小学校に入ってすぐのときに、妹さんと二人で「人さらい」に遭ったというスリリングな体験談を話されました。でも、それも本当にその時の様子とか、帰った後に妹さんと二人でお風呂に入ってほっとしているときのこととか、すごくよく覚えていて、ひしひしとその場面が伝わってくるようなお話でした。たかどのさんは、小学校入学のときに本当にしっかりしたお嬢さんだったらしくて、お母さんが「さあ、ほうこちゃんも来年から小学校ね。」と言ったときに、「どうして。何で行かなきゃいけないの。私が頼んだわけでもないのに。」と言ったそうです。6

歳の女の子が。それで、お母さんが「そんなこと言ったって、きまりだからしょうがないのよ。」と言ったら、「じゃあ、ピンク色のランドセルを買ってくれたら行ってもいいよ。」と言う交換条件を出されたそうです。当時、ピンク色のランドセルなんて無いんですよ。でも、たかどのさんの御両親は、ちゃんとピンクのランドセルを用意されて、それを担いで学校に行ったという話をされました。

私も小学校当時の話をしたのですが、今、皆さんに一つ御披露したいのは、本当によく覚えているんですけど、私もランドセルの思い出があります。今年が入学だというその年の、お正月が終わってすぐ、東京のおばあちゃんとおばちゃんから私のところに小包が届きました。「富安陽子様」という小包が届くだけでも、天にも昇るような気持ちでした。「ああ、私あての荷物が届いた。」、初めてだったと思います。そしてそれを開けたら、中には真っ赤な、ピッカピカの革のランドセルが入っていました。もう、嬉しくて嬉しくて、私はその日一日中、そのランドセルを担いでいました。トイレ行く時も、ご飯を食べる時も、さすがにお風呂に行く時は下ろしましたが、パジャマ着てからも。母がいよいよ、「あなたねえ、傷つくよ。持ってく時に傷ついちゃうから片付けましょう。」と言われるまで、ずーっとランドセルを担いでいました。

そして3月、いよいよ4月の入学が近付いたある日に、私の父が、名前を書いてくれることになりました。うちの家では、名前を書くのはなぜか父の役割でした。丸いちゃぶ台を居間に出して、父は何かあらたまった様子で、そのちゃぶ台の正面に座っていました。私はその横にやはり正座をして、今からランドセルに名前を書いてもらうのを待っていました。父は、ランドセルの横にある名札に名前を書くぐらいではだめだと言いました。「こんなちいちゃんところに名前を書いたって、みんな同じランドセルなんだから間違えるといけないから、もっと大きく書かないといけない。」それで、父は、ふたを開けた裏の、この革のところにでかかど富安陽子と書くと言ったわけです。「その方がいいから。そしたら誰も間違えないから。」と。母はそこに父が書きやすいように、ふたを平らになるように押さえていました。そして、父がキュッと黒の油性マジックを開けると、まだ冷たい空気の中に、マジックの何とも言えない匂いがプンと匂いました。私は胸がキュンとなりました。「わあ、いよいよ名前を書いてもらえる。」そしてじっと息を詰めて、父がランドセルに名前を書くのを見守りました。父は書きました、大きな字で「富」「安」「秀」「雄」と書きました。私は「ああっ。」と叫びました。「うわあっ。」で父は叫び、母も「わっ。」と叫びました。もう何かみんな大パニックになって。「ひでおって書いたー。」って私は思いました。私はあんなに動揺した父を見たのは生まれて初めてで、父はものすごい「あっ。」で言ってて、子供心に「何か、やっぱり言ってあげないといけない。」と思って、「お父さん大丈夫だよ、大丈夫だよ。書き直せばいいんだから。」と言いました。「そうだな。そうだな。」で言って父は、「秀雄」を二重線で消しました。それで、横に「陽子」と書きました。これは、その後、母が本当に奮闘努力しましたが、消えませんでした。それはもう、ベンジン持ってきたりだとか、砂消しなんてとんでもないし、それから、サンドペーパーで擦ったりもしたんですけど、全く消えませんでした。ですから、私は6年間、「富安秀雄改め富安陽子」というランドセルを担いで小学校に通いました。

でもこうやって、本当によく覚えています。今でも、まざまざとその時のことを映像として覚えている自分がいます。さっきスクリーンに出ていた『もとこども』っていうのは、そういう私の小さい時の不思議な体験、生まれて初めて体験した不思議だったかもしれません。本当に不思議だなと思いました。「妖怪」っていうのは、おばあちゃんの話で、何か近所付き合いのように、どこにでもいるものだと思っていましたけど、大人っていうのが、みんな子供だったっていう発見は私にとって、人生で初めての大発見でした。その発見をもとに書いたのが、『もとこども』という絵本です。

こういうふう小さい時のことを手がかりに書いているんですけども、かと思うと突然、いろんなフレーズとか、ちょっとした風景とか、何か名前とか名詞とか、そういうものからお話がわーっと浮かんでくることもあります。これは、『オニのサラリーマン』っていう絵本なんですけれども、これは、夢で見ました。2014年の初夢に、赤鬼が出てきました。その赤鬼は、サラリーマンでした。地獄に勤めているということが分かりました。朝、ちゃんと普通に起きて、奥さんにお弁当を持たせてもらって、子供たちに「お父さん行ってらっしゃい。」と言われて、元気に出かけていきます。すると、バス停には大勢の鬼たちがバスを待っていて、そのバスでみんな地獄の正門前に行き、そこで閻魔大王に挨拶をして、閻魔大王からその日の仕事を割り振られます。赤鬼のその日の仕事は、「血の池地獄」の見張りでした。血の池のそばに行くと、大きなプールの監視員みたいな椅子があって、そこに座って亡者の見張りをするんですけど、まったく亡者が言うことを聞きません。飛び込みをする奴、浮き袋を持ち出す奴、けんかを始める奴、それで苦労に苦労を重ねて、そういう亡者たちの見張りをして、やっとお昼休みが来て、愛妻弁当を食べると眠くなるんですね、鬼も。うつらうつらとして、はっと目が覚めると大変なことが起こっているわけです。亡者たちが大脱走を図っていて、極楽の方から一本、糸がおりてきているわけです。それで「わー、これはえらいことだ。」って言ったら、プツッと糸が切れて、みんなボシャーんと池に落ちこちる。という夢を見ました。大変完成度が高かったので、これは絵本にした方がいいだろうと思って、起きて一挙に絵本を書き上げました。それがこの『オニのサラリーマン』です。では今日はちょっとこれをお読みしてみたいと思います。

(『オニのサラリーマン』の読み聞かせ)

ありがとうございます。大阪弁バージョンなんですけども、これを鹿児島弁にアレンジして読んでいただいても、あの「おいは、オニでごわす。」でも全然オッケーです。いろいろ変形バージョンで読んでいただいても、御当地の言葉で読んで方が面白いかなと私は思います。なぜ、標準語にできなかったかというと、やっぱり地獄ですし、鬼ですし、ちょっと一歩間違うと、おどろおどろしいし、何だかあまり真剣になれない世界なんですけど、大阪弁にすることで軽やかな「笑ってごめんね」という感じになればいいなと思って大阪弁にしました。これは、父の日のプレゼントに結構買われたようで、お父さんに子供がメッセージを入れて、「お父さんご苦労様」みたいな感じで贈られたという話を聞きました。うんと小さい子供たちには難しいんじゃないかなあと思って、むしろ小学校に入って、生活科で、家の仕事と



かお父さんの仕事とか仕事の話なんか習った後に読むと面白いかなあ、「鬼も結構仕事で大変なんだなあ」みたいな感じで面白いかなとも思ったんですけども、小さい子も、語呂が面白くて好きで読んでくれる子がいて、うちの近所に2歳の男の子がいるんですけども、その子にこの絵本が出た時にプレゼントしたら、その子が後日お母さんと二人で芸を見せに来てくれました。「暗記しました。」って言って、2歳の子で、暗記はしていないんですけど、ちょっと言いすぎかなと思ったんですけど、お母さんがまず読んで掛け合いをするという読み方で、「わしオニでんねん。」って言うと、その子が「しゅんまへん。」と言い、母「地獄勤め」、子「シヤラリーマン」っていう、それだけの芸なんですけど、それを見せに来てくれて、語呂がおかしいので、ちっちゃい子でも楽しく読めるのかなあなんて思いました。

こうやって、夢で生まれた話もあります。ただ、一回夢で出たら、毎年、正月が明けると出版社から電話が掛かってくるようになって、「今年はどんな夢を見ましたか。」って。でも、なかなか、そういつもいつもうまくいくわけではありません。そうやって、何かのワンフレーズとか、夢で見たこととか、それから小さい時の原体験とか、そういうものからお話っていうのは生まれていきます。決して、「お話のたね」というのは、遠い世界に落ちているものではなくて、私たちが暮らしているこの日常の、毎日の中に必ずあるものだと思っています。それを拾い集めて、物語を作っていくというのが、私たちの仕事なのです。

小さい子っていうのは、本当に不思議を見つけるのが得意で、私は息子たちを二人育てていて、何度か息子たちからそのお話のたね、不思議のたねをもらいました。うちの長男は、小学校に入って、一つどうしても書けない字がありました。とみやすようこの「よ」という字です。うちの子は左利きなので、なかなか大変で、よく、1年生なんか「鏡文字」といって、反対に書く子がいると思うんですけど、ところがですね、うちの子の字は大変ユニークで、こういう間違い（鏡文字の「よ」）じゃないんです。うちの子のノートにはときどき、こういう「よ」の字（横に寝た「よ」）が出てきました。大変書きづらいただろうと思ひまして、息子に「しーちゃん、どうしてこうなっちゃうの。」って言ったら、息子が説明をしてくれました。「だって、ようこの『よ』の字は、上から下に降りる時は頭が下でいいんだけど、横向きに歩いて行く時には、地面に足がついていないといけない。」と言いました。よく聞いたら息子には「よ」の字が犬に見えているということが分かりました。だから横向き（横書き）のときには、絶対こうしとかなないと、形的に収まりが悪いと思っていたみたいです。縦書きのときにはこれでいい。だから、横書きのときには、こういう字が出てきたんだなっていうことが分かりました。その時に、「はっ、ちっちゃい子に、字ってこんなふうに見えるんだ。」と思ひました。私たち大人が当たり前だと思ひて見過ごしてしまうことを子供たちは、その中に不思議を見つけ、そこから不思議な物語が生まれます。お話っていうのはいつもそうやって生まれるものだなと思ひます。

下の子は上の子から2年遅れで入学したんですけども、入学して1週間ぐらいのときに、鹿児島市の小学校でも、あるかどうか分からないんですけど、「学校探検」という行事があります。要するに、学校の施設案内ですよ。先生がクラス単位でクラスの子供たちを学校の中を連れて歩いてくださって、いろいろ設備のことを説明いただくわけです。「給食室はここで、

給食の食器はここに下げますよ。」とか、「図書室はここで、図書カードでこうやって借りましょうね。」「お手洗いはここで、手はここで必ず洗って、水はここで流して。」といったことを全部説明してくださるんですね。その時、うちの息子は、職員室に入った時に、職員室の校長先生の机の後ろに大きなロッカーがあるんですけど、そこを勝手に開けようとして先生に、「いけません。勝手に開けちゃいけません。」と言われました。その時、息子は先生に聞いたそうなんですけど、「校長先生はどこにいるんですか。」と。そのロッカーの中に校長先生がいると思ったらしいんですね。というのが、幼稚園のときに、うちの子の幼稚園の園長先生は、園長室がなくて、職員室にいらっしゃる園長先生でした。幼稚園の頃って園長先生って結構よく遊んでくださるんですね、一緒に。でも、小学校の校長先生ってお忙しくて、会議に出ておられたりとか、幼稚園の園長先生もお忙しいのですが、うちの息子の中ではそういうイメージだったんだと思います。校長室で誰かお客さんと会ってらしたりとか、だから入学式のときに会ったきりだったんですね。それで、今、入学式のときの写真を見てみると、息子は校長先生の隣にいます。「確か、おったはずや。」と、「確か、おったなと。そういう人が。」「一体どこにいるんやろ。」と思ったようです。「あの先生、どこいったんやろ。見かけへんなあ。」と。それで、校長室以外にも校長先生の机はありますから、職員室の机の後ろのロッカーを見て、「ははん。あそこの中やな。」「あそこに入っとんな。」と思ったようです。でも、こうやってお話は生まれます。いつも見慣れているものに、「もしかしたら」とか、「こんなことがあったら」って、ちょっとと思うと、そこから物語が生まれて育っていく。「たね」から、どんどんどんどん芽を吹いて育っていくわけです。だって、もしロッカーに住んでいる校長先生がいたら、かなり面白い話になると思われないでしょうか。何で、そんなところに住む羽目になったのか、そして、ロッカーの中の家はどんなふうになっているのか、どこに通じているのか。そうやってどんどん考えることでお話というのは育ち、生まれ、一つの完成した形になっていくわけです。いつも、お話のたねというのは、日常の中にあると思っています。

子供の本というのは大変難しい部分もありまして、今、楽しい面白い仕事だっていうお話をさせてもらったんですけど、やっぱりその難しさってというのは、作り手と受け取り手のギャップが大きいということです。子供たちが何を待って、何をドキドキワクワクしてくれるかっていうことを、私たちみんなで手探りしながら作り上げているわけです。

息子たちと暮らしていて、ちっちゃい子っていうのは、本当に大人と違う時間、違う世界を生きているっていうことを実感したことが何度もあります。下の子が幼稚園の年長さんのときに、なりたかったものがあります。それは、象でした。でも、3歳の時に、初めて息子が「なりたい。」と言ったのは、もぐらでした。それで私は、もぐらは、いやだなと思いました。苦労しておなかを痛めて産んだ息子の最終目標が「もぐら」っていうのは、親としてちょっと許せないものがあるなって思いました。息子に聞きました。「まーちゃんは、どうしてももぐらになりたいの。」すると息子は、答えて言ってくれました。「まーちゃんは、お布団に潜ってねんねしてるのが好きだから、大きくなってもずっと地面に潜ってねんねしてたい。」と言いました。これは、うちの夫が大変立腹いたしまして、息子に説教を始めました。「これから将来を背負って立つ若者が、なんというやる気の無いことを言うんや。」と。「もぐらっていうのはなあ、一日に体の重さの何十倍もの虫を食べな、生きていかれへんのやぞ。だから、もぐらはずっと毎日、地面を掘って掘って掘りまくって、血のにじむような努力をして暮らしてんね

ん。お前にそのもぐらの苦勞が分かるか。」と言いました。まあ、3歳児ですから、なかなかもぐらの苦勞は分からないと思うんですが、私はむしろ、なぜ夫がそこまでもぐらの苦勞を知っているのか聞きたかったんですけど、そういうことを言うと夫婦仲が悪くなりますから黙って聞いていました。

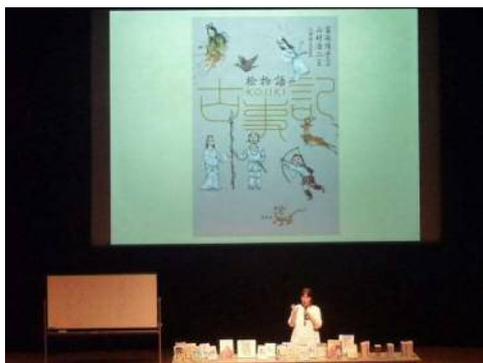
下の子は本当にあきらめのいい子で、いつもいさぎのよい、大学受験のときも、なんとあきらめのいい子だろうと思わせてくれたわけですが、その時も、「もう、もぐらは向いてないな、もぐらは無理かも。」と思ったようで、次になりたいと言ったのが、象でした。これはもう、多分息子の「大きくなりたい願望」が根底にあったのではないかと思います。「大きくなりたい、象になりたい。」だって、2歳上のお兄ちゃんは、いつも威張っているわけです。お父さん、お母さんはろくに相手にしてくれません。さっき、おままごとの話をしましたが、女の子がうちに来ておままごとをする時には、当然お父さんの役を上の子がします。下の子って本当にふびんなもので、大体、おままごとのときに回ってくる役は、赤ちゃんか犬ですよ。赤ちゃんだと「おぎゃあ、おぎゃあ。」って言ってないといけないし、犬だと「ワンワン。」って言ってなきやいけないです。お父さんの役も、どうかなって思うんですけど、「行ってきます。」と言って帰ってくるだけです。だから下の子っていうのは、そういうふびんなところがあります。ヒーローごっこをすれば、お兄ちゃんがウルトラマン、私はバルタン星人の役なんですけど、下の子はピグモンの役でした。ちょっと凶暴しておきたいと思います。ウルトラマンは御存じだと思うんですけど、バルタン星人って知っていますか、宇宙忍者。こういう、ザリガニに似たタイプで手のはさみになっているんですよ。私はいつもこのバルタン星人の役でした。それでいつも「フオッフオッフオッフ。」と言ってソファの陰から出ていく役で、下の子のピグモンっていうのは、正義の味方の怪獣なんですけど、あまり能力の無いやつで、こんなふうな感じの。分かります？風船持ったりするんですけど。こんな赤い怪獣、下の子はいつもこの役でした。ピグモンは、何にも役がないからずっと跳ねているだけで、ハヤタ隊員が2段ベッドのロケットで宇宙パトロールする時も、ずっとピグモンは「お前は地球で待っている。」って言われて床の上で跳ねてなきやいけないっていう役で、だから、ずっと象になりたかったんだと思います。象になりたい、どうしたら象になれるかな、「まーちゃんはどうやったら象になれると思う？」って、ずっと聞いてました。友達の家に行った時も、その家のおばちゃんに「おばちゃん、人間は幼稚園行って、小学校行って、中学行って、大学生になってから、象になる人もおるやんな。」って言って、その家のおばちゃんに、「ちょっといっぺん家に帰ってお母ちゃんと相談してみ。」って言われて帰ってきたことがあります。でも、本当にそれぐらい、「ああ、この子って、象になりたい、なれる、なろうと思ってるんだ。」って思いました。だとしたら、私と息子が、その当時「宝塚ファミリーランド」っていうのが家のそばにあったんですけど、そこに動物園がありましたが、同じ日に同じ場所に立って、同じ象を見上げていても、「私に見えている象と、この子が見ている象は、全然違う象なんだな。」と。私にとっての象は、大きな四つ足のほ乳類、鼻が長いほ乳類でしかないけど、息子は、「自分がやがて象になるかもしれない」、もっと言ったら「昔、その象が自分のような幼稚園児で、青いカバンをさげて黄色い帽子をかぶって幼稚園に通ってたやつがこうなる。」と思って見ているわけですから、「あ、私が見ている象とこの子が見ている象は違う。この子は私と違う世界を生きている。」と思いました。子供の本を書く難しさは、やっぱりそ

こにあると思います。全然違う価値観，全然違うスケール，何かとんでもない世界の中に暮らしている，そういう住人たちに，その世界のとんでもなさや輝きに負けない物語を手渡していかないといけない。そこが本当に難しいところだと思います。

ただ，私もちょっと心配になって，小学校入学のときまで，卒園文集に，将来の夢『象』って書いてたので，「あの，すみません先生，うちの子，来年小学校なんですけど，大丈夫でしょうか。」って聞いたら先生が，「何にも心配いりませんよ。毎年みんな『猿になりたい。』とか『蝶になりたい。』って卒園していきますけど，ちゃんとみんな立派な小学生になりますから，心配いりません。」て言われました。ある時，講演会でこの話をしたら，終わった後に一人のお母さんが手を挙げられて，「今日は本当に富安さんのお話を聞いてよかったです。うちの子は，『輪ゴムになりたい。』って言って，心配してたんですけど，大丈夫なんですね。」って言われて，私は内心，「輪ゴムは，どうかなあ，大丈夫じゃないんじゃないかな。」と思ったんですけど，もちろん，そうは言えないので，「大丈夫ですよ，きっと人を束ねる，人の和を大事にする，そういう大人になれるんじゃないですか。」と言ったことを思い出します。

長いこと，輪ゴム志願の子が私の中でトップだったんですけども，その後に，鳥取の小学校で子供たちの前で話をした時に，3年生の女の子が終わってから手紙をくれて，「富安さんのお話は面白かったです。特に，子供が象になりたい話はマジうけました。家に帰って早速お母さんに言ったら，言われました。『何を言ってるの。あんたは小さい時に，焼きそばパンになりたいって言うてたんやで。』」それも結構，衝撃的でした。だから本当にその，象あり，焼きそばパンあり，輪ゴムありという，もう無限の選択肢，無限の広がりの中で生きている，その子供たちに負けない，その世界の広がりにも負けない物語を書こうと，私たちは日々願って書いているわけです。

だいぶ時間が迫ってきましたので，あと2，3，この九州にも関連のあることを御紹介して終わりたいと思います。



これは『古事記』です。九州は，古事記に関してもゆかりの深い土地だと思うんですけども，これを去年，本にして出しました。これは，学校の図書館司書の友達から以前頼まれていたもので，学校では最近，神話を習うそうなんですけど，「子供たちに，もうちょっと分かりやすい形で，『稲羽の白うさぎ』とか，『ヤマタノオロチ』とか個々でお話はあるんだけど，通して神様の物語，日本の神話として，『国生み』から最後の『海幸山幸』までの一段の物語を全部通して読めるような，子供たちが読めるような，読みやすい日本の神話を一つ作ってって出版社の人に言っといてくれないか。」とされました。ちょうど偕成社の方に会ったので，「そういう子供たちが読みやすい，全部通しての神話というのが欲しいっておっしゃってましたよ。」って言ったら，その出版社の人が，「じゃあ，富安さん書いてくださいよ。」って言われて，気軽に「いいですよ。」って引き受けた次第です。

でもこれがまあ，ほんとに大変でした。本当に大変な作業でした。ぜひ読んでいただきたいと思うんですけど，大人の方でも，「これを読んで初めて全部読めました。」とか，「こういう



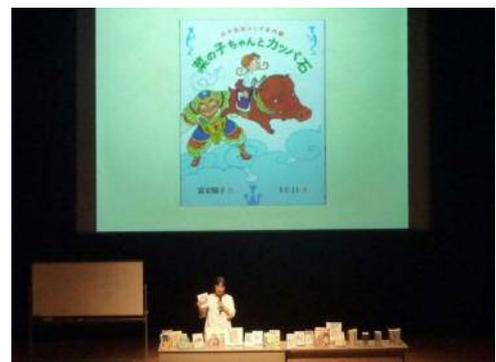
古代の語られているイメージを勝手に作るわけにはいかない、そのイメージを解き放って揺らぐイメージをもう一度俯瞰<sup>ふかん</sup>して、どの器に入れていくか、そして、どういうリズム、どういう文章にしていくか、本当に難しい作業でした。

それで、もう一つ、この本の工夫しているところは、本当に長いお話ですので、子供に飽きずに最後まで読んでもらうために、「絵巻物のような本にしたいね」という企画を考えました。つまり、巻物のような装丁はできませんけれども、全ページに絵を入れました。ページの半分が文章、半分が絵という構成にしたわけです。だから全部、絵の展開と文章の展開が一致しています。これも、大変でした。絵本なんかのときには、場面で私は書いていきます。15場面書いて、開いたら次の場面に移るっていうことをするんですけど、これは、二百何十ページあるんですけど、つまり125見開きぐらいを、全部見開きで、場面完結で書かないといけない。次のページに次の場面がくるっていうように文章を切っていくといけないし、それがまた、流れていかないといけない。それから、1ページに入る文章量が限られますから、その限られた文章量で一つの場면을言い切らないといけない。しかも、使う言葉を何にするか考えないといけないという苦勞がありました。

絵描きさんも大変だったと思います。250ページ分の絵を描いてくれる絵描きさんというのは、なかなかいません。こういう長編の、例えば高学年向けの「シノダ」っていうシリーズにしても、絵自体は30カットくらいです。絵本にしても15見開き。だから、「250ページ分の絵を描いてくれる人は誰だろう。」という時に、この山村さん、この方は私と「妖怪一家の九十九さん」シリーズで一緒しているんですけど、国際的に有名なアニメーターの方です。いろんな国際賞をとっている方で、アニメーションというのは御存じのようにセル画を一作のために1,000枚とか10,000枚とか描くらしいんですね。山村さんなら案外、「250枚ぐらい、ちょろいよ。」と、おっしゃるんじゃないかと、山村さんに「お願いします。」と言って、山村さんも実際にアニメーションで日向編をアニメにしていってくださったから、古事記のことを大変お好きで、「やります、やります。」と言ってくださって、250ページにわたる全ページ絵入りの、絵物語としての古事記が誕生しました。これは多分、子供たちにも大変読みやすいし、あと、司書の先生から言われたのは、「読んで分かる」。「今までの古事記は、読みきかせても途中で飽きちゃったり、意味が分からないところが多かったけれど、ちゃんと物語として子供たちが聞いてくれる古事記ができてうれしい。」と言ってもらいました。ぜひ、九州ともゆかりが深いので、一度手にとって読んでいただければと思います。

最後に一つお願いがあります。これは「菜の子ちゃん」というシリーズなんですけど、これはもともと「菜の子先生」というシリーズからスピノフした作品です。菜の子先生っていうのは不思議な先生で、いろんな小学校に現れて、一人の子供がちょっと心細かったり困ったりというときに現れて、不思議な夢のような世界を見せて、また、どこへともなく去って行きます。

「菜の子先生、また会えますか。」「運がよければね。」と言って、いなくなってしまう。そういう不思議な先生の話です。「菜の子ちゃん」っていうのは、この菜の子先生のちっちゃいと



きの話なのかどうなのか、そこは、よく分かりません。ひょっとすると同時代に二人が生きているのかもしれませんが。時空を自由に行き来できる子供なのかもしれません。菜の子ちゃんは謎の転校生です。いろんな学校にやってきて、転校生でやってきて、その学校の子と一緒にその土地にまつわる不思議を体験して。そして、みんな誰も覚えていません。一日だけ現れ、月曜日になって、「いたよね。」って言っても誰も覚えてない、その子しか覚えていない。名簿にも載っていない、座席表にも、でも確かにいた。そういう謎の転校生の話なんですけれども、これは、昔話とか土地にまつわる伝承をもう一回、今の物語の中にあらためて、新しい物語として命を吹き込みたいと思って始めたシリーズです。昔話を昔話として語り伝えるだけではなくて、土地に伝わる不思議を、今のお話として書きたいと思いました。



この『菜の子ちゃんとカップ石』っていうのは、下関のお話です。下関にはカップ石にまつわる伝承があって、昔、大勢のカップたちが下関にやってきて、悪さをしていたんですけども、あるカップがつかまって、そのときに、「この石がここにある間は、絶対私たちは下関には近づきません。」と言って、カップの証文を交わして、いなくなるんですね。その「カップ石」っていうのが、砂子多川（すなこだがわ）という川のほとりに置いてあるんです。でも実は、そのカップ石は新しい石なんです。本物は、明治の大水のときに流れてしまって無くなっているんですね。このお話は、そのカップたちが何百年ぶりに、その石を見聞にやってくるわけです。それで、その石が昔の石ではないと分かったら、カップたちがまたやってくるかもしれない。そこで、菜の子ちゃんとその学校の子供が協力して、流された石を見つけ出して、カップたちが見聞する間、なんとかその石をその元のところに置くっていうお話です。

下関にはそれと同時に、平家伝説もあって、平家の武将たちは、負けて壇ノ浦に沈んだ後に平家蟹になったんですね。平家の女御たち、海に沈んだ女官はカップになったという伝説があります。それから、赤間神宮があって、そこに「耳なし芳一」の像があったり、平家の武者のお墓があったり、そういう、包括してその土地に伝わる伝説が、この新しいお話になりました。

それで、お願いしたいといったのは、九州の話はまだ書いていません。九州で何か面白い伝説、伝承があったら、福音館のホームページをクリックして、ホームページの『菜の子ちゃんとキツネ力士』っていう、今一番新しい3巻目の所をクリックして、「特集」というページに出ると、今、キャンペーンで、「情報をお寄せください」というのがあります。それで情報を寄せていただくと、「菜の子ちゃん干社札」という縁起のいい物がもらえますので、是非是非、菜の子ちゃんの舞台になるような、面白い伝説・伝承・言い伝えがあったら、皆さんにお願いします。九州の皆さんにお寄せいただきたいと思います。次に菜の子ちゃんが現れるのは、皆さんの町の学校かもしれません。これは、絵描きさんも現地に行って、全部取材して絵を描いてもらっていますので、現地の子供たちが見れば、これがどの小学校か、名前は出していませんけれども、どこの場所かっていうのは全部分かると思います。そういう新しい伝説、新しい昔話を作りたいと思っているので、是非是非、情報をお寄せください。

もう時間になりました。今日は本当に長い時間ありがとうございました。これで終わります。